１．発育・発達の時代推移に関する研究

②最近の三、四歳児の発達

母子保健研究部　加藤忠明
京都教育大学　松浦賢長
保健指導部　中野恵美子・山口規容子
母子保健研究部　水野清子・千賀悠子
平山宗宏

要約：愛育病院で1989～91年に出生した児のうち、両親とも外国人、極低出生体重児、ダウン症候群児を除き、保健指導部を生後１～４８か月時に受診した乳幼児2152名を対象とした。今回調査の３歳児（受診率約36％）、４歳児（受診率約14％）は、1970年前後の同部受診児と比べ、「友達遊びの機会がある」、「大人との関係が良好である」、「食事は自立している」、「歯磨きする」、「手洗いする」等、対人関係や社会性の発達項目の達成割合は有意に多かった。これらの変化は、子どもの生活環境や親の意識の変化によると考えられる。しかし、偏食の有無、排泄の自立等に関して、有意差は見いだされなかった。３～２４か月健診時に主訴数が多い場合、また、発達が遅れ気味の場合、３７～４８か月時に経過観察となる割合は有意に多かったが、それ以前の経過観察必要例がその時点で経過観察不要となる割合も有意に多かった。

見出し語：　三・四歳児、発達の比較、発達の予測性、幼児の生活習慣、乳幼児健診

The Development of Three and Four Year Old Children: Recent Findings on Health Guidance

Tadaaki KATO, Kencho MATUURA, Emiko NAKANO, Kiyoko YAMAGUCHI,
Kiyoko MIZUNO, Yuuko CHIGA, and Munehiro HIRAYAMA

Summary: Recent data on 3 and 4 year old Japanese children showed significantly better daily life activities (in play with friends, relationships with adults, eating by oneself, tooth brushing, hand washing, etc.) than was the case 20 years ago. These data may be due to changes in both children's environments and in parental consciousness. Yet there appeared to be no such cohort differences for other items (e.g. unbalanced diet, use of the toilet by oneself, etc.). The numbers of complaints and the developmental items in health guidance, during the first 2 years of life, had significant correlations with development in the 3rd and 4th years of life. Beyond age 4, however, development in most cases returned to normal.

Key Words: Child development, Preschool children, Three year olds, Four year olds, and Child health guidance

Ⅰ　目的

最近の０～２歳児の発達は、約20年前のそれらと比較してやや早い傾向が認められ、これは乳幼児を取り巻く環境の変化による差と考えられた[1,2,3]。それらの報告に引続き今年度は、３、４歳児の発達を調査した。また、０～２歳児の発達に関する問診項目等が、どの程度その後の児の発達を予測しうるものなのか、３、４歳児の発達との関連性を分析した。

Ⅱ　対象

対象は以前の報告とほぼ同様、総合母子保健センター愛育病院で1989年４月から1991年２月に出生した2324名のうち、両親とも外国人（163名）、極低出生体重児（8名）、ダウン症候群児（1名）を除き、同センター保健指導部を健康診査のため受診した乳幼児2152名（男児1110名、女児1042名、1500～2499ｇで出生した低出生体重児122名）である。この対象児のうち、生後35～36か月時の受診児は780名（受診率36.2%）、生後37～38か月時の受診児は87名（4.0%）、生後39～40か月時の受診児は22名（1.0%）、生後41～42か月時の受診児は56名（2.6%）、生後43～44か月時の受診児は11名（0.5%）、生後45～46か月時の受診児は12名（0.6%）、生後47～48か月時の受診児は303名（14.1%）であった。最終集計時点を1995年１月としたため、その後に受診する幼児もいる。従って、４歳近くでは受診率がやや少なく、逆に、３歳前後の受診率は前回の報告よりやや増加した。

Ⅲ　方法

主として母親への問診により記載されている保健指導部カルテ[4]をデータシートに書き写した後、京都教育大学の大型コンピューターでＳＡＳを使用し分析した。最近の３、４歳児の発達を以下のように評価し、以前の同様の調査と比較等を行った。

１、発達及び生活習慣の達成割合

比較的受診児数が多かった生後４７か月０日～４８か月３０日時の受診児に関して、発達や生活習慣の項目の達成割合（受診時点で、ある発達項目等が可能であった割合）等を求め４歳児の発達を評価した。以下1993年値と略す。

２、発達及び生活習慣の年代別比較

1970年前後に同部を受診した３、４歳児の同様の調査（調査期間は1960～1975年であるが、その約90%は1969～1975年出生児である。以下1970年前後値と略す）[5,6]と比較した。

３、発達の予測性

０～２歳児の月齢別の発達項目や主訴数（いずれも母親への問診による）と、医師または、心理相談員による生後３７～４８か月児の発達評価との関連をみるため、X^2検定により対照群と比較した。

Ⅳ　結果

１、発達及び生活習慣の達成割合

４７～４８か月児303名に関する主な1993年値を表１に示す。幼児健康度調査[7]とは、対象月齢及び質問内容が微妙に異なるため、厳密な比較はできないが、大きな差は認められなかった。

表１、４７～４８か月児の発達や生活習慣の達成割合等（１９９３年値）

目つきの心配なし（93.2%）、よく聞こえる（97.6%）、交互に足を出し階段をおりる（93.7%）、
片足けんけん（91.6%）、はさみで形を切り抜く（98.0%）、顔や手足を正しく人の絵を描く（77.9%）、
三色がわかる（97.0%）、数を100以上数える（14.6%）、10以上数える（96.9%）、友達がいる（95.9%）、
友達と上手に遊べる（97.9%）、幼稚園･保育園に喜んでいく（90.1%）、その日あったことを話す（93.2%）、
正しい発音（84.6%）、大人との良い関係（99.7%）、約束やきまりを守る（86.2%）、食事の自立（94.9%）、
栄養に問題あり（10.7%）、小食（14.1%）、むら食い（42.2%）、食事に興味なし（3.7%）、偏食（33.7%）、
上手にはしを使う（60.5%）、食事の手伝いに興味あり（94.1%）、料理作りを手伝う（88.2%）、
昼寝なし（62.2%）、睡眠問題なし（93.5%）、歯みがき（98.7%）、手洗い（99.3%）、うがい（96.0%）、
洗面（94.2%）、一人で排便の始末（64.4%）、一人で排尿の始末（75.0%）、排泄問題なし（79.7%）、
衣服の着脱大体できる（92.7%）、後片付けする（84.8%）、くせ有（47.2%）

表2　37～48か月健診時の発達評価と関連が見られた24か月以前の問診項目等

24か月以前の健診時に問題のあった問診項目等			37～48か月健診の評価で経過観察となった理由			経過観察不要症例 注1）
			発達	行動	母子関係	
3か月	問診	首すわり	***			
4か月	問診	首すわり				***
5か月	主訴の数		**			
	問診	寝返り				*
6か月	問診	足をつっぱる	***			
7か月	主訴の数		***	***		
	問診	支え座り	***	***	***	
		お座り	*	*	*	
		両手でガラガラを持つ	***			
8か月	主訴の数		***	***	***	
	問診	ずってはいはい	*			*
		四つばい	**	*	*	**
		立たせればつかまり立ち	***	*	*	***
		一人でつかまり立ち	**			**
		小さいものをつまむ				**
		いないいないばあを喜ぶ	***	***	***	
9か月	問診	ずってはいはい	**	*		
		四つばい				**
		立たせればつかまり立ち	**	**		**
		一人でつかまり立ち		*		***
		両手のものを打ち合わせる		*		
		小さいものをつまむ	**	***	***	
		後追い	***	*		***
		呼びかけるように声を出す	**	***		
		いないいないばあを喜ぶ	**	**		**
		玩具を取られるとおこる	*	*		
		後から名を呼ぶとふりむく	***			
10か月	主訴の数		***			
	問診	伝い歩き	**			**
		引き出しをあけて出す	**			
		後追い	*	***		
		動作を見てまねる	***			
		言葉をきいて動作する				*
11－12か月	主訴の数		*		*	
	問診	はいはい				*
		伝い歩き	***	***		***
		一人立ち	*			
		一人歩き	**	**		
		じょうずに歩く	**	*		
		ボールを転がし返す	***			
		バイバイをする	**			
		発語	**		**	
		言葉の理解	***		***	
		簡単な命令を理解し行動	***			
17－18か月	問診	走る	***	*		
		手をひかれ階段をあがる	***	***	*	
		なぐり描き	***	**		
		積み木を2～3コ積む			***	
		掃除や化粧などをまねる	***			
23－24か月	主訴の数		*			*
	問診	よく歩く		*	**	
		走る	***			
		両足とび	*			
		つかまって階段のぼりおり	*			
		ボールをける	***			
		外でよく遊ぶ	*		***	**
		友達がいる	*			
		二語文	**			
		歌う	**			
		なあにとよく聞く	**	*		**
		排泄はさそってでる	*	*	*	
		排泄はでたら教える	***			
8～10か月健診の発達評価で経観となった理由		発達	***	***	***	
		行動				
		母子関係				
		その他	***			
18～24か月健診の発達評価で経観となった理由		発達	***	***	**	
		行動	**	***	**	
		母子関係	***	***	*	
		その他	**	**		

注1）、30～36か月健診時に経過観察となったが、37～48か月健診時に経過観察は不要とされた症例
注2）、*：p<0.05、　**：p<0.01、　***：p<0.001

2、発達及び生活習慣の年代別比較

1993年値と1970年前後値に関して、カルテ記載が全く同じ内容の項目は必ずしも多くはなかったが、その項目のみを比較した。

①生後３歳半位での比較

４１～４４か月児に関して、1970年前後値と比較した1993年値は、昨年度の「３歳位での比較」[3]とほぼ同様の結果であった。「三輪車をこぐ」幼児の割合は少なかったが、「円を描く」、「ブランコをこぐ」、「でんぐり返し」、「鉄棒」、「友達遊びの機会がある」、「友達と上手に遊べる」、「くせ無し」、「歯磨きする」割合は多かった。また、「少食」や「むら食い」の割合は少なく、おやつを規則的に与えている割合は多かった。ただし、例数が少なかったので有意差は必ずしも認められなかった。

②生後４歳位での比較

４７～４８か月児の1993年値と、４７～５０か月（90%以上は４７～４８か月）児の1970年前後値との比較では、「友達遊びの機会がある」幼児の割合は、前者284／296＝95.9%、後者806／943＝85.5%（$p<0.001$、以下、***で示す）、「大人との関係が良好である」割合は、前者286／287＝99.7%、後者488／507＝96.3%（$p<0.01$、以下、**で示す）、「食事は自立している」幼児の割合は、前者281／296＝94.9%、後者521／587＝88.8%**、「歯磨きをする」割合は、前者299／303＝98.7%、後者692／784＝88.3%***、「手洗いする」割合は、前者298／300＝99.3%、後者538／564＝95.4%**であり、主として対人関係や社会性の発達が、最近、有意に早くなっていた。しかし、偏食の有無、排泄の自立等に関して、有意差は見いだされなかった。

3、発達の予測性

生後３７～４８か月の間に受診した幼児433名中、小児科医の診察で「発達」に関して経過観察または問題点を指摘された3人（0.7%）、心理相談員により、「発達」に関して経過観察が必要とされた8人（1.8%）、「行動」を経過観察6人（1.4%）、「母子関係」を経過観察5人（1.2%）、３０～３６か月健診で経過観察とされたが、３７～４８か月健診にて経過観察の必要性なしと判断された9人（2.1%）について、有意な関連がみられた１～２４か月健診時の問診項目等を表２に示す。

３７～４８か月時の要経過観察例に関して、１、２か月健診時の項目は有意な関連が見いだされなかったが、３～２４か月健診時の主訴数の多さや発達の遅れを示す項目とは有意な関連が多く認められた。以前の報告と同様、一般的な乳幼児期の発達項目、「首すわり」、「お座り」、「つかまり立ち」、「はいはい」、「伝い歩き」、「一人歩き」、「発語」、「命令理解」、「走る」、「階段のぼりおり」、「二語文」等は、その後の幼児の発達と密接な関連が認められた。

Ⅴ　考察

３、４歳児の対人関係や社会性の発達項目は、最近、有意に早くなるものがあった。これらの変化は、子どもの生活環境や親の意識の変化によるものであろう。一般に良好な親子関係のもとで、乳幼児を暖かく受容する親に育てられた子どもの発達はより良いものになるといわれているので、最近の家庭環境の良い一面を表していると考えられる。

３～２４か月健診時に主訴数が多い場合、また、発達が遅れ気味の場合、３７～４８か月時に経過観察となる割合は有意に多かった。このことは乳幼児期の発達の関連性を示しているが、必ずしも将来を予測できるものではなかった。また、生後３６か月以前の健診時に経過観察が必要とされたが、３７～４８か月時には経過観察不要となる割合も、ことに乳児期に発達の遅れ等を示す場合、有意に多かった。主訴数が多い場合や発達が遅れ気味の場合、健診時の心配事は、長い目で見て消失することが多いことも含めた適切な助言や指導、相談が望まれる。

参考文献

1）加藤忠明、望月武子他：最近の乳児の発達。日本総合愛育研究所紀要第27集：7～10、1991。

2）加藤忠明、望月武子他：最近の一、二歳児の発達。日本総合愛育研究所紀要第29集：15～18、1993。

3）加藤忠明、平山宗宏他：最近の二、三歳児の発達。日本総合愛育研究所紀要第30集：9～13、1994。

4）高橋悦二郎監修：乳幼児健診と保健指導。医歯薬出版、1993。

5）加藤忠明、望月武子他：乳幼児期の情緒・言語発達に関する縦断的研究。日本総合愛育研究所紀要第25集：3～8、1989。

6）望月武子、加藤忠明他：乳幼児期の運動発達、生活習慣に関する縦断的研究。日本総合愛育研究所紀要第26集：12～14、1990。

7）日本児童手当協会、日本小児保健協会：平成２年度幼児健康度調査報告書。1991。